

海外・帰国子女教育の再構築

佐藤郡衛

各レベルの研究をみると、三つの視点、ないしアプローチの方法が見出せる。第一は一つの文化的な基準をもとにした「適応モデルともいうべき「単一文化的視点」、第二は複数の文化間を比較しそれぞれの特徴を説明する「比較文化的視点」、そして第三は複数の文化間の接触、相互作用に焦点をあて、その結果生ずる葛藤や統合などに焦点化する「異文化間的視点」の三つである。こうした視点の相違は、文化概念にも明確に反映しており、単一文化的視点や比較文化的視点では、文化を静態的にとらえているのに対して、異文化間的視点では文化を動態的にとらえ、相互作用を通して文化は変わりうるものとしてとらえられる。三つの視点とも異なった文化的背景をもつ個人、ないし集団の相互作用を分析するが、その文化的文脈の強調の仕方に差がみられるのである。単一文化的視点とは、一方の文化への適応を強調する「同化、ないし適応的アプローチ」をとり、比較文化的視点とは、二つの文化の違いを強調する「比較的アプローチ」をとる。そして、異文化間的視点とは、二つ、あるいはそれ以上の文化が同時に交差し、その相互作用を強調する「相互作用的アプローチ」をとる。

表5-2 日米の国語教科書の比較分析 (%)

	日本	アメリカ
自立心、強い意志などの個の重視	3.3	25.4
創造性と個性	3.8	27.8
暖かい人間関係	25.6	11.0
自己犠牲の精神	3.8	0.0
他者への感情移入	7.8	1.0
公正、自由、平等	0.0	6.2
その他	55.7	28.6

次に、教科書の学習を通して間接的に学習するという側面を具体的な事例を通してみていこう。今井康夫は日本とアメリカのそれぞれの小学校国語の教科書の内容を日本二二一篇、アメリカ二〇九篇について興味深い比較分析を行っている。それによると、アメリカでは、「自立心、強い意志などの個の重視」を扱った題材が五三篇で二五・四%、「創造性と個性」に関する題材が五八篇で二七・八%にも達し、この二つで全体の半数以上になり、日本と比較するときわめて多い。この他に「公正、自由、平等」を扱った内容もアメリカには登場する。一方、日本では「暖かい人間関係」を扱った題材が五四篇と全体の二五・六%、「他者への感情移入」が一六篇で七・八%、「自己犠牲」が八篇で三・八%などとなっており、「人間関係」の中で相手の気持ちになって考えられるようなやさしい一員」になることが強調されているという(表5-2)。

表1-2 海外・帰国子女教育研究のレベルとその視点

海外・帰国子女教育のとらえ方	研究の視点		
	1 単一文化的視点	2 比較文化的視点	3 異文化間的視点
文化のとらえ方	適応モデル	特性伸長モデル	共生モデル
研究レベル	静態モデル	比較モデル	可変モデル
I 構造レベル	<ul style="list-style-type: none"> 同化を強い構造的特質、制度化した学校文化 自文化中心主義 	<ul style="list-style-type: none"> 日本と欧米との教育制度、構造の比較研究 海外の就学形態の比較研究 	<ul style="list-style-type: none"> 共生のための教育制度、構造 カリキュラム計画(普遍的なカリキュラムへの志向)
II 集団レベル	<ul style="list-style-type: none"> いじめ 差異化 日本的対人関係やコミュニケーションの特質 	<ul style="list-style-type: none"> 帰国子女の特性 教師-生徒関係や生徒同士の関係の比較 学校文化の比較 	<ul style="list-style-type: none"> 教師文化の変容 学校文化、学級文化の葛藤、変容、統合
III 個人レベル	<ul style="list-style-type: none"> 同化 外国はがし 日本語力 カルチャー・ショック 	<ul style="list-style-type: none"> 異文化適応・不適応 アイデンティティ(文化的、個人的)の比較 	<ul style="list-style-type: none"> バイカルチュラルリズム アイデンティティの葛藤、統合など、海外・帰国子女の現実世界の把握
実践レベル	<ul style="list-style-type: none"> 同化教育 適応教育 	<ul style="list-style-type: none"> 特性伸長教育 外国語保持教育 	<ul style="list-style-type: none"> 相互交流教育 国際理解教育 二言語教育

佐藤郡衛
海外・帰国子女教育の再構築